



MORIOKA
ROTARY CLUB WEEKLY

第36回例会(4月14日)
平成29年4月28日発行

クラブ事務所 岩手県盛岡市菜園1丁目10
川徳デパート内
例会場 同上 TEL(651)1111(代)
例会日 毎週金曜日12時30分～

会長 駒木 進
幹事 海野 尚
会報 熊谷 隆司
クラブ事務局 TEL(653)5682
FAX(653)5622

ROTARY SERVING HUMANITY. '人類に奉仕するロータリー'…… ジョン F ジャーム



ゲスト卓話

『最近の寺事情』

高金寺(紫波町)住職
大松 博典様

何から話そうかと思いましたが、会長さんのご挨拶に「暖かくなってきた」と言っていたので、そのあたりから。「暑さ、寒さも彼岸まで」と申しますが、ただ、このへんでは「彼岸という寒が来た」という言い方があり、もう1回ぐらい、雪が降るのではないかと考えています。

お寺の話を致します。

3週間ほど前、紫波町の本誓寺さんが来たとき聞きました。「こんなにお坊さんだらけで良いのかな」と疑いましたが、「良い」ということでした。お坊さんの話を聞きたいということであれば、ぶっちゃけた話が「坊主、丸儲け」の話だとか、「お布施はどのくらいか」とか、「お葬式はどれくらいかかるのか」といった話を聞きたいだろうと思いますので、そういう話はしないように、と思いましたが、つつい喋ってしまいます。

私は、高校に行っても話していますので、最近の生徒の話をしたと思います。こんな話を聞きましたので、何かの参考になればと思います。「聴衆が何人いても、アガったら壁を見る」ということです。真ん中と端と端を見て話す。そうすると、あちこち見ながら話すことになる。それから、「聞いている人を三人、見つけれ」という事です。「何百人が目の前にいようと、三人を見つけれ。うなずいている人と笑っている人。そういう人に向かって話す、大体上手くいくよ」こういう話を聞きましたので、その通りにしたいと思います。笑われないと困るの

で、遠慮しないで笑っていただきたいと思います。

私のいるお寺は、紫波町の「高金寺」と言いますが、「高い」に「金、銀」の金で寺です。永泉寺とか来迎寺とか、増上寺とか、そういう名前の寺はいっぱいありますが、「高い金の寺」はないですね。何やら、裏で「お布施が高いぞ」と言っているらしいのですが、「寺の名前が高いのだから、当たり前だ」と言っています(笑)。

さて、皆さんはお寺が全国にどれくらいあると思いますか。コンビニよりも多いんです。コンビニは五万軒ぐらいいあります。お寺は七万七千あると言われていました。今、日本にある宗派や宗旨。何々宗何々派ですね。それは十三宗五十六派あると言われていました。東北は、ほとんどが曹洞宗です。岩手県で、他の宗派さんも入れると、大体五百三十と思われれます。紫波町の私のところのそばは、寺があり過ぎです。檀家の取り合いですね(笑)。昔からの檀家なので、変わることはないんですが。

今はいろいろと事情が変わりまして、葬儀屋さんもその通りだと思いますが、お寺もだんだん変わってきました。どこのお寺なのか、なかなかわからなくなってきました。「お寺さんで話をしてくれ」と呼ばれて、いろいろ話のですが、そのときに「三つだけ、やっておいてください」と話しています。

まず一つは、「遺影を用意してください」と。写真がいちばん困るんですね。ご自分が好きな

写真で良いです。七十代で亡くなっても、二十代の頃の写真でも良いのです。若いときのきれいな頃の写真でも良いです。うちのお寺で、お孫さんが、車椅子のおじいちゃんとおばあちゃんを沖縄旅行に連れて行った時の写真。ホテルで、下着のシャツ姿でおじいちゃんがVサインをした写真をお葬式に使いたいと言いました。「良いですよ」と答えました。普通であれば、顔だけに、黒いネクタイ姿の合成写真にするのですが、「良いんだ、良いんだ」と言いました。火葬場は盛岡だったので、そこに行ったところ、これが面白かったですね。遺影がVサインをしたおじいちゃんの下着姿ですからね（笑）。すれ違った人が「あら？」と、振り返って見るんですよ（笑）。まずは、写真を用意しておくこと。

二つめ、今は病院で亡くなる人が多いですね。病院から、すぐ何とか会館に行って、それから火葬場へ行って…と、ですから「『一晩ぐらい自宅に寝せてもバチは当たらないんだから』と言っておいたほうが良いですよ」と言っています。途中をすっ飛ばしてやらないで一旦、自宅へ寝せてもらいなさい。これが二つめです。

三つめは、お寺がどこなのか、話しておくこと。自分が亡くなると、言えませんからね。家族に「俺に何か、あったときには、お寺はあそこだからな」というのを教えておいてください。

生まれてくるのは偶然なんです。誰も知らないうちに生まれる。気がついたときには生まれているんです。で、死ぬのは必然なんです。必ず死にますから。死ぬのは突然なんです。誰にも看取られないで死ぬのを「孤独死」というらしいのですが、考えてみますと、病院に入っていようが、何をしようが、亡くなる時は突然、亡くなりますよね。肚を決めたほうが良いです。

「死んだらどうなるか」とか、「死んだあとのいろいろなことが、どうなるのか」ということが、坊さんの専門なんですけど、「聞きたくない」という人もいるかもしれませんが、曹洞宗の話でいきます。資料は用意しておりません。以前は資料を持ってきて話していたんですが、高校

での講話時、あることに気がつきました。資料を見ながらだと、下ばかり向いて話を聞かず、あまり彼らの勉強にはなりません。それで、資料がないと質問をするようになる。そういうことで、資料はありません。

曹洞宗だと、この世とあの世の間があって「中有（ちゅうう）」と言います。これが四十九日なんです。インドからの考えで、インドでは生き物は生まれ変わると考える。生き返りはしません。早い人だと、亡くなって一週間めに生まれ変わると考えました。だから、七七・四十九日で供養をします。これが、中国に入ると「百箇日（ひゃっかにち）」となります。百箇日は「卒哭忌（そっこくき）」とも言います。卒哭忌の「哭」は、ハラハラ泣くほうではなく、慟哭の「哭」、体を震わせて泣くほう。つまり、体を震わせて泣くほどの悲しいことが終わる。これが百箇日です。これが日本に入ってきた。中国では「三年、喪に服す」というものがあったりして、二年間は…。なぜ二年間かという、人間が亡くなると、だんだんに腐ってしまう。最後には骨と水と何かになってしまう。それに二年かかるということで「三年、喪に服す」でした。日本人は丁寧なので、七回忌・十三回忌と、三・七・三・七と供養して、ちょっと前までは「三十三回忌の拝み納め」と言いました。ところが最近、皆が長生きになったので、五十回忌が拝み納めになりました。そうやって拝んで、故人はご先祖様に入ると考えます。そこまでの間の名前がお戒名となります。この世の名前は俗名となります。インドでは、生命は、人間になったり動物になったり、グルグルと輪廻すると考えます。これが中国に入ってくると、中国人はそんなに待ってられない。現実的なことを中心にやる。日本は簡単で、この世とあの世しか考えません。死ぬとは考えず、この世からあの世に行って、生まれると考える。「往生」という字は、この世からあの世へ行くから往生と考えます。

葬式は、なぜすると思いますか。…人間だから、葬式をします。人類学で有名な北イラクの

シャリダールという洞窟の中に、人間の骨があって、お花の種があった。三千五百年か、もっと前のもので、人類が葬式をした、もっとも最初のものではないかと言われています。人間だから、葬式をする訳です。犬や猫は葬式をしないでしょ。(人間が)犬や猫のための葬式はしても、犬や猫が葬式をすることはない。人間として祝福されて生まれてくるのだから、いなくなるときも、みんなに送ってもらうという、ごくごく当たり前のことだと思います。コマースリズムに乗りまして、樹木葬とか何とか葬とありますけど、それは送り方の問題で、死んでまで「ああせい、こうせい」というよりも、死んだら残った人たちがやってくれるようにお任せすればいいと思います。ちょっと前の時代であれば、犬や猫が亡くなれば「ああ、そのへんの木の下さ、埋めておけ」となったのですが、今は立派な写真がくっついて、七回忌ぐらいまで拜む。どうなっているんだ、この世の中は、と思います。海を見たことがない人が「散骨だ」と言ったり。散骨ですが、法律があって、海岸からポタッと骨を落とすことはできない。なんぼか、海に出ていかなければならない。舟を雇ってそこまで行く。結局、七回忌ぐらいまでやるんですね。舟をやとって海に出て、花を置いてグルグル回る。普通の人、葬式も普通にやっていますよ。ただ、「何だか、おかしいな」と思います。

我々は曹洞宗ですが、道元さんのお寺が総本山です。福井県の永平寺ですが、道元さんは自分で曹洞宗なんて、一言も言ったことがない。沙門(しゃもん)。仏弟子という意味ですが、「沙門道元」と書いた物しかないんですよ。道元さんは中国に留学したんですが、何も持たないで帰ってきた。普通であれば、教典とか仏像を持って帰ってくるのに、何も持たないで帰ってきた。「正伝の仏法」ということで、インドから正しく伝わった仏教で布教活動をしています。「正しく伝わった仏教とは何か」を、書きましたが、九十五巻も書いたところで、五十三歳で亡くなりました。

お蔭さまで、というか、ご縁がありまして、

NHK文化センターで講座を二つ、やらせてもらっています。ひとつは「仏典を味わう」。今までは般若心経と法華経、今は華嚴経を読んでいます。あと、涅槃経を読むという話です。幸いなことに、興味深い人がいっぱい来てまして、なかなか盛況でございます。

もうひとつは「歩く仏教塾」をやっています。毎月第三火曜日に。去年・一昨年は青森・秋田・岩手のお寺さんを回ろうと。今度は南東北。今年は「岩手県のお寺さんを回るかな」ということで、一日三カ寺が限度です。年間十八カ寺を回ることができる。五百三十カ寺を回るには、あと何年かかるか、わかりませんが。このふんど、あと百年ぐらい生きないと何ともならないのですが(笑)。

お医者さんは「人間は百二十歳まで生きる」と言いますね。上手いこと病気をすり抜ければ百二十まで生きられる、と最近言われ始めました。昔も今も一緒かもしれませんが、禪宗のお坊さんたちは「六十・七十は洩垂れ小僧」と言った。これは「当たっているかもしれないな」と思います。世の中的には、六十を越えて定年になると「第二の人生」と言いますが、私は逆だと思っています。子育てしたり、仕事があったり、家を建てたりというほうが第二で、それから解放されたときが第一になると思っています。つまり、この世に生まれてきて「何か、やろうかな」と思ったとき、回りに制限されないで、本当に自分がしたい何かができるのは「六十・七十からかな」と思っています。ですから、この頃は故人を送る人が九十幾つということがだんだんに増えてきました。

今、百歳以上が日本に六万七千人ぐらいいるそうですけど、百歳以上の人を送ることもポツポツと増えてきました。この間、七十六歳で亡くなった人の弔辞が「あまりにも早い」というものがありました。確かに、七十六ぐらいだと早いあと、つくづく思いました。

というところで、おあとがよろしいようで。